

# 小さな図書館

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

## Little Free Library



小さな図書館の例

([マサチューセッツ州](#))

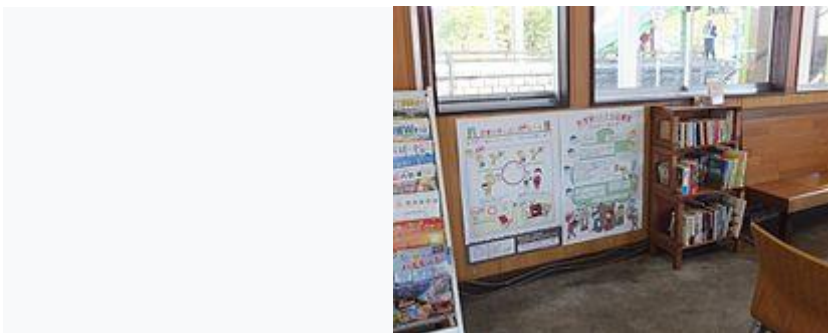
小さな図書館 (ちいさなとしょかん、[英語](#): Little Free Library) は、地元の地域社会の人たちに小さな箱に収められた本を無料で貸し出すという[アメリカ合衆国](#)および他国にも広がっている非営利の運動である。[マイクロ・ライブラリー](#)と呼称されている<sup>[2]</sup>。

概要[\[編集\]](#)

この運動は[ウィスコンシン州](#)のハドソンで始まった。このアイデアは愛書家で学校の教師だった母親への想いからトッド・ボル (Todd Bol) によって考案された。彼は小さな校舎のような外見を持つ木製の図書館を芝の庭の支柱の上に設置した。ボルはパートナーのリック・ブルックス (Rick Brooks) と共にアイデアを広め、メディアで取り上げられたことから急速に運動は広がった。小さな[図書館](#)のオーナーを始める人は、人形の家ほどの大きさの図書館を自分で作成することもできるし、会に依頼すれば製作したものを購入することもできる。小さな図書館は会のウェブサイトから登録すれば番号の割り当てを受けて [GPS](#) 座標を通じて検索されるようにすることも可能である。登録するとオーナーは「小さな図書館」の看板を受け取る。図書館にはしばしば「一冊借りて返す時はできたら一冊寄付して」(Take a Book, Leave a Book.) という依頼が記されている<sup>[3][4]</sup>。日本ではまちライブラリーを含めたマイクロ・ライブラリーが 1,000 にのぼると推定されている<sup>[2]</sup>。

分類[\[編集\]](#)

マイクロ・ライブラリーは図書館機能優先型、テーマ目的志向型、場の活用法、公共図書館連携型、コミュニティー形成型などにその形式によって分類される<sup>[2]</sup>。テーマ目的志向型としては少女漫画に特化した[少女まんが館](#)などがある<sup>[2]</sup>。まちライブラリーは私設図書館の一種で本の寄託者が感想を付し、閲覧者がそれにまた感想を付して交流を図っていくものをいう<sup>[2]</sup>。



日本国内での設置例 (秋田県秋田市、[新屋駅](#))

小さな図書館は庭先以外に喫茶店やバス停、店先にも設置されている。自作の図書箱には木枠やミルクの缶など地元で入手できる材料を用いて工夫して作られたものや、中には自然災害で出た瓦礫で作られたものもある<sup>[4]</sup>。公園や通りなど所有者がいない所に設置すると落書きをされたりゴミを入れられたりチラシが貼られてしまい失敗に終わる。スチュワードと呼ばれる情熱を持った管理人が毎日世話をする事で成功する。<sup>[5]</sup>

一方、ウィスコンシン州のホワイトフィッシュベイでは、前庭には郵便受けを含め物を設置してはならないと村が定めた条例に反するとして、小さな図書館を設置した教会に撤去が求められるという事件が起きた。ホワイトフィッシュベイの村の委員会は小さな図書館は公共図書館に相当するようなものではないと言い、どの家庭に対しても設置許可を与えようという問題が生じている<sup>[6]</sup>。

小さな図書館は、自前の図書館を持たない農村部や災害で図書館が被害を受けた場所に寄贈されてきた。2013年2月の時点で、全米50州と世界40カ国がこの読書プログラムに関わってきた。現在は世界で5000の登録された小さな図書館があり、登録されていないものも1000ほどはがあると推定されている<sup>[7]</sup>。

アフリカでは読むための本を入手するのが極めて困難という状況がある。米国のロータリークラブは小さな図書館を西アフリカのガーナで識字率向上に役立てようとしている。ミネソタ州にある「アフリカに本を」の会も、本と共に小さな図書館をガーナに送ることにした<sup>[3][8]</sup>。

## パブリック本棚



街角に神出鬼没の“パブリック本棚”。人口7万超の町アルンスベルクでは、中心街に設置されていた Photo: Aki SCHULTE-KARASAWA

地域で共有する知のリサイクル ドイツが起源の“パブリック本棚”とは？

読み終わった本やいらなくなった本、みなさんはどうしていますか？ わたしは、過去に日本で古本屋チェーンへ本を持ち込んだ時に思い入れのあった本も一様にグラム単位で価値を計られ残念な想いをしてから、美術本として価値が高い本は図書館へ寄贈するなどしてきました。ここドイツでは、古本屋や図書館以外に“パブリック本棚”（Öffentlicher Bücherschrank）を利用して本をリサイクルするという方法があります。（2016年9月30日）  
| ドイツ国内には1000カ所以上



中が見える扉が付いたパブリック本棚。最下段が子供向けの本コーナーになっていた Photo: Aki SCHULTE-KARASAWA

パブリック本棚は1990年台にドイツ・ハノーファーで誕生したアイデアとされ、ドイツを中心として主にヨーロッパで展開されてきました。ドイツ国内の設置場所は、ざっと数えて1000カ所を超えています ([OpenBookCase.org](http://OpenBookCase.org) より)。

パブリック本棚のしくみは簡単。誰もが無料で利用することができ、本棚から本を借りて同じ場所へ返却することはもちろん、持ち出してほかのパブリック本棚へ投入したり、新たに自分のお気に入りの本を投入したりすることができます。本棚のデザインに決まったものはありませんが、基本的にはしっかり地面の固定された本棚に中が見える透明なプラスチック板やガラスの扉が付いています。

そして設置場所は神出鬼没。ベルリン、ケルン、デュッセルドルフといった都市だけでなく村の街角にも設置されていますし、中心街や大通り沿いと言わず住宅街にある場合もあります。ドルトムントでこれまでみかけたことはなかったのですが、調べてみると歩いて20分くらいの場所に設置されていることがわかりました。さっそくサイクリングがてら立ち寄ってみることにしました。

### 地域の文化向上のため

アパートが連なる公共広場に設置された本棚は、合板を用いた木製。こげ茶色にペイントされ、風景に馴染んでいました。本の数は、200冊ちょっとといったところでしょうか。小説が中心ですが、中にはパソコンのシステム解説書も並んでいました。アメリカで1980年に出版された Eric Van Lustbader の『The Ninja』のドイツ語版、『Der Ninja』もありましたよ。



アパートが集まる場所に設置されたドルトムントのパブリック本棚

訪れたパブリック本棚の運営は、ドルトムントを拠点とする不動産の協同組合により行なわれていました。本棚の横に貼られた説明書きには、地域の文化向上のために設置しているということが、利用方法とともに短文で記載されていました。モットーは、「探していたものを見つけ、持っているものを与える」だそうです。



本のラインナップは多種多様

Photo: Aki SCHULTE-KARASAWA

## 「旅する本」のサービスも

本は、知の結晶。優れたアイデアに、類似のサービスも生まれています。アメリカでは鳥箱のようなコンパクトなサイズに本がぎっしり詰まった「Little Free Library」というサービスが2010年に登場。NPOにより運営され、ことし1月にはおもにアメリカ国内で3万6000カ所の設置を達成したそうです。

また2001年には、本単体を不特定の人たちとシェアするという「ブッククロッシング」というアイデアが誕生しています。こちらは各本をID登録してIDのラベリングをしたら、ともに旅をし読み終わればその場に置いてみるというもの。本は次の読者へと共有され、その行方はウェブサイトにてID追跡できます。ユーザーが多い国のおよそ4分の1はアメリカですが、次いで16%がドイツとなっています。

ところで、ドイツには日本の文庫にのように縮小版の本がありません。したがって、本および本棚は重厚。我が家だけでなく、これまでうかがったどの友人宅にもリビングルームや書斎の壁を埋め尽くすほどの本が並んでいました。パブリック本棚に本を共有できれば、省スペース。そして丈夫な本だからこそリサイクルできるのかもしれないね。

## 誰でも借りられる誰でも置けるまち角の図書館



大阪の池田市に「まち角の図書館」という、誰でも自由に本を借りられて、読み終わった本を置いておけば誰かが借りいくという、共有本棚のようなものがあるらしい。面白そうなシステムだ。一体どんな風になっているのか、どんな本が置かれているのか。

## リトルフリーライブラリー

### 気軽に作れる私設図書室

リトルフリーライブラリーとは、ざっくり言えば「小さな私設図書室」です。郵便ポストのような木箱に、10冊から20冊程度の本を並べて私有地に設置します。本好きの方なら、一度は「私設図書室を作りたい」と夢見るのではないのでしょうか。その夢が、リトルフリーライブラリーで気軽に叶えられるのです。



10冊から20冊という数も絶妙ですよ。

できるだけバラエティ豊かに、でもこのシリーズは外せない・・・とセレクトに熱が入りそうです。実際に近所のライブラリーをのぞくと、特定の作家の小説が多かったり絵本中心だったりキリスト教の本ばかりだったり、オーナーの趣味嗜好が伺えて興味深いものです。



リトルフリーライブラリーには、返却期限もなければ貸出冊数の上限もありません。貸出カードを作る必要もありませんし、誰でも好きな時に好きなように利用できます。

設置場所も、たいていは自宅やお店の玄関先ですが、中には公園や動物園などのユニークな場所に設けられたものもあります。

日本語で「小さな無料図書館」と訳されるリトルフリーライブラリーですが、フリー（free）は「無料」というより「自由」という意味の方が近いように思います。

「始めるのも利用するのも自由」という軽やかさがいいのか、この取り組みは瞬く間に全世界へ広がり、2016年1月時点でライブラリーの数は3万6千にまで達しています。

鳥取でじわじわ浸透中。大阪には先駆けが？

リトルフリーライブラリーは、日本でもほんの少しずつ広がっているようです。水木しげる、谷口ジロー、青山剛昌など人気漫画家の出身地である鳥取県では、「まんが王国とっとり」の小さな発信基地として3か所にライブラリーが設置されているそう。今後、中心市街地に増設する可能性もあるとのこと。

また大阪モノレールの駅構内では、同様のコンセプトを持つ「モノレール文庫」が既に24年間も続けられています。本を自由にシェアする文化は、何も特別なものではないのかもしれませんが。

人々の善意と読書への情熱から成り立っているこの取り組み。今後ますます広まっていったら楽しいですね。

## リトルフリーライブラリーと、持ち去り屋

けっこう前から「小さな図書館（リトルフリーライブラリー）」の活動はいいな、と思っていた。

アメリカ発祥のこのボランティアは、要するに「本の貸し出し」を、個人がやるってことだ。

家で読まなくなった本を、自宅前ボックスに出して、本が買えない人や、子供に読んでもらおうというものだが。前に、東京で始めようとした人の、挫折の記事を読んだことがある。問題は、日本では古本ビジネスが盛んで、これを使って本をごっそり持って行って、現金化してしまう持ち去り屋が、全国津々浦々にいることだ。この人らが、持って行ってしまうのだ、という。

で、この人らの「持って行って何が悪い」という言い分と、個人が「読んでね」と、本を事実上差し出している環境は、法的に取締りが難しい相関性があること。

ゴミ捨て場から持ち去るのでさえ満足に取り締まれないのに、自宅前のボックスなんて知るか、という、(当時の)警察のスタンスが、挫折を生んだらしい。つまりこの国は本好きの善意より、経済活動を優先しているんであり。これが国是である以上、もう無理、と、挫折した人は語っていた。

現状では、セキュリティがしっかりしている、会社の正門前とかが、日本で辛うじて続く、リトルフリーライブラリーらしい。

だがこのへん…ちょっといじれば、上手くいきそうな予感がする。

商店街の「人とどまってほしいところ」とか、実は本を買い足していくのが負担になっている本が読める喫茶店とか。このへんにポン、と置いて、商売人の管理でセキュリティもいい、というの、できそうな気がする。

あと一工夫で、リトルフリーライブラリーは、日本にも広がりそうである。

わしは、本好きである。

地域にリトルフリーライブラリーがあるなら、供給者になることは、間違いは無い。

一方で、歴史馬鹿一代でもある。官営の図書館が、「人の入り」ばかりを気にして、貴重な古書をどんどん廃棄する現状を「意味あるの図書館」という目で、見ている者でもある。

官営図書館の醍醐味は、目録から、一冊の本の行方を追い、実際に読めることにある、と思う。司書さんだって、「もはや岡山にここしかないであろう本」の管理に、やりがいを感じるはずだ。

全国チェーンの古本屋で手に入る程度のものはおろか、今や雑誌だらけの図書館では、なんか違う。

リトルフリーライブラリーは、その辺さえ穴埋めしてくれる、ちょっと素敵活動だと思う。